



Title	昭和52年度・社会教育の展開：小樽市にみる
Author(s)	安田, 陽子
Citation	北海道大学教育学部社会教育研究室報, 1977, 96-102
Issue Date	1978-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28607
Type	bulletin (article)
File Information	1977_P96-102.pdf



[Instructions for use](#)

昭和52年度・社会教育の展開

－小樽市にみる－

社会教育研究室・聴講生 安 田 陽 子

1. はじめに

人口186,993人(昭和53年1月末)の小樽市民を対象に、自治体と民間団体がそれぞれに窓口になって社会教育計画を企画・展開し、毎年の行事になっている。それらの項目をたどって52年度を眺めたい。

2. 項 目

社会教育

対象	名 称	主 催	会 場	運営主体	期 間
老令者	1.小樽市老壮大学	小樽市社会福祉協議会・市老人クラブ連合会・小樽グリーンライオンズ	総合福祉センター	〔社福協〕	10/1~11/17 20日間 毎週水木金
	2.老人福祉センター活動	老人福祉センター	同センター	〔社福協〕	月曜休館毎日
一般市民	3.小樽市民大学講座	小樽市民大学講座実行委員会	北陸銀行・小樽支店	〔社教課〕	2/14~3/1 8日間 毎週火水金
	4.小樽市成人学校	小樽市教育委員会	市役所分庁舎	〔社教課〕	I期5/24~6/17 II期6/28~7/21 III期9/6~10/6
	5.市民文化祭	小樽市文化祭実行委員会	産業会館・市民会館	〔文団協〕	10/14~11/5
	6.博物館事業	博物館	博物館・屋外分庁舎	〔教 委〕	5・6・7・8月(2回) 11・1・3月
	7.文学碑めぐり	図書館	市内11ヶ所の文学碑	〔教 委〕	5・10月 それぞれ2回づつ
	8.小樽市自主文化事業	市民会館	同会館	〔民生部〕	7/1 昼・夜
	9.消費者講習会	消費者センター	市役所分庁舎	〔民生部〕	3・5・7・9・11・1月
婦 人	10.定期講座	小樽市勤労婦人センター	同センター	〔経済部〕	I期5~9月 II期10~12月 III期1~3月
	11.特別講座	同 上	同センター		11/26
	12.新婦人の会(会員へ)	新日本婦人の会小樽支部	各地域別	〔団 体〕	年間

青年	13. 婦人学級 (父親学級)	各学校PTA学習部	各小・中学校	〔社教課〕	年間 各所
	14. やんぐすくーる	小樽市勤労青少年ホーム	同ホーム	〔経済部〕	I期5～6月 II期8～9月 III期10～12月
	15. 定期講座 文化 クラブ・スポーツ クラブ	同 上	同ホーム		年間
青少年 (小中 学)	16. 商工青年学園	小樽市教育委員会	市役所分庁 舎	〔社教課〕	6/1～12/21
	17. ジュニアクラブ	青少年科学技術館	同館	〔教委〕	5～8月
	18. 学習旅行	同 上	道内各地		9月
	19. 野外観察会	同 上	山・野・海岸		6・9月・8月
	20. 夏休み工作会	同 上	同館		8/17・8/18
	21. おたるこどもの つどい	こどもの集い実行委員会	小樽市総合 体育館・公 園見晴台	〔民生部〕 〔町内会〕	9/4

社会体育

全市民	1. 屋内教室(8種)	小樽市総合体育館	同館	〔教委〕	通年・年間
	2. 屋外教室(8種)	同 上	屋外各所	〔教委〕	通年
	3. 温水プール教室 (10種)	温水プール	同プール	〔教委〕	通年
	4. スイミングクラブ	水泳協会	温水プール	〔団体〕	毎週火木曜
	5. 水泳学校(小・中 学)	同 上	蘭島海水浴 場	〔団体〕	7/26～一週間
	6. 夜間スキー講座 (5回)	スキー連盟	天狗山スキ ー場	〔団体〕	1～2月各3日間 5回

社会福祉

視力障 害者	教養文化講座	小樽市盲人福祉協会	総合福祉セ ンター	〔福祉事 務所〕	2/18・2/19
	バレーボール交 換会	札幌視覚障害者協会	総合体育館		3/5

この他に保健所が主催する市民健康相談や妊婦にたいする母親学級、その他があるが、ここではふれない。

3. 活 動

人口20万弱の地方都市が市民に向けて企画する社会教育の面する問題はさまざまである。主催者からの主旨・目的が受ける側の応答とうまく一致するかである。

教育を考えると受け側・する側と区別でき、一応それを住民と役所に区分することもできる。そこで企画・計画の過程が両者からも考えられるのであるが、市民はとかく受身側の体制より判断するので、利用しにくくなれば途中で不参加の態度表明となる。教育をする側・役所、受け側・住民と分けることが不十分であることは云うまでもない。企画する側、受け側の役割分担により行動が開始されるのであり、ここに社会教育が問題にしたい点がある。設定された場面内でも社会教育は役割が交代する場面がしばしばあり、学校教育が固定されたものに対して、活動内では生徒・教師が逆になって然りである。

その他、住民の住む生活環境・地理的条件からくる地域の歴史的発展と生活形態も不可分な社会教育の展開方法はその制約を受ける。

小樽が歩んできた数十年の歴史が現市民を育て、物的遺産、その他、風土、産業はこれらの発展上にあるし、また将来はここからの展望である。私達が今日考えなければならない問題がここにある。

教育展開が市民を対象に行われるから、その企画内容にこれら諸条件が組み込まれ、目的に応じて回数を重ね、結果的に好評が得られることが望ましい。多人数の出席があることも一つの効果である。

①実活動

実活動と運営。施設をもって運営にあたる場合と施設をもたずして会員や一般市民に呼びかける場合の展開法にはそれぞれの配慮に相違がある。一方は施設・設備の利用を充分にする。施設が遊ぶ場合もあり得るから。参加者が多いことを目標にし、動員することのPRと出席率が定着する条件の分析が重要である。他方出席できない原因を個人的理由に求めるばかりでなく、その理由内容を種類別に考えることができる。その分類は運営上の指針に役立つ。

②展開の手續

展開の手續と結果分析。受けの人に向かっての展開が受けやすいこと。ここに展開の苦慮がある。企画の労は内容設定の魅力につながる。展開方法が参加者を長続きさせる要素となる。これらは云われるほど容易でない。実際はなかなか困難である。

受けの人の構成とどんな興味で集まってきているかの検討分析が重ねられて、その効果に重み加わる。

③事後活動

事後活動と次回以後の計画。何らかの動機で行動に参加し、全課程を終えたとき、参加者同志の親睦と今後にかかわる運営方針に意見を加えてくれる集団になりえる。サークル活動が重視される。このグループからの口コミ宣伝が活動の幅を広げるし、自主運営に自発的リーダーが生まれることも集団の現象である。この継続組織は会員間の運営であっても、企画・運営の一要素であることにかわりない。

4. 計画と効果

効果をねらった活動であり、計画であることが前提である以上、細心の計画であることが要求され、評価される。

計画は参加者として、また企画者として活動状況を概観され、その特色に経験が折り込まれ、展開には十分な準備と人間愛があふれている。そんな場面に出合うとき、人はそこに感動と魅力を感じる。これらは終ってからの感動となり人に伝えられる。

施設や設備は人によって、その利用目的も使用範囲も当然異なる。参加者の感想からみると企画者の意図された心の暖かさは物を越えて伝わる現象を被いきれない。参加者と企画者に相通ずるものができたとき、展開過程にその跡が次々に残る。

プログラムが効果の決定要因をしめる。参加者の重かった腰を上げさせ、参加してみて「よかった」「面白かった」「有効であった」の印象が残り、それが企画者の反省材料になる。次回の計画運営をしやすい方向へむけ、より密な内容への展開となる。

企画者はその喜びとともに残された事後処理に全力を投球し、明日からの活動に備えなければならない。活動中の教訓が大きければそれを生かして豊かな人生へつながるだろうし、「生きがい」教育論の内容であろう。創造の喜び、これは人間の喜びである。

5. 講座・講習内容

名称	講座・講習内容	(備考・申込み者)	出席者
老壮大学	老令者の役割・生きるよこび・老壮大学のあり方 高令者マナー・軽運動と音楽・時事解説・心のやす らぎ・風雅と生活・漢方随想・等 [注I] 講座終了後に選択科目のクラブが生れた。 園芸(10名)・陶芸(5名)・版画(13名)・書道(23名) [注II] 講座参加出席者の感想作文は意欲とよこびであふれていた。 [注III] 程度の高い内容についていけない人も反面あった。	選択・園芸(23名) 陶芸(8名)・版画 (13名)・書道(20 名)	延員
老人福祉 センター	民謡・舞謡・詩吟・書道教室各月1回2時間 棋同好会 時間割別室利用 週2日浴室利用 [注I] 常連の中でボス化するリーダーや弱い者のいじめの傾向をいましめ る。	踊り・歌・ダンス・碁・将	登録員 延3619名
市民大学 講座	道内外の大学教授その他専門家による講師8名 現代を生きる＝主テーマ	8講座 211名	170名
成人学校	初級簿記・謄写技術・水彩画・趣味の園芸・書道・ 料理A・ペン習字・文学入門・民謡入門・デッサン と油絵入門・ 内I期9コース II期5コース III期6コース	I期275名 II期141名 III期215名	率 74.00 78.92 68.54
市民文化祭	市展(洋画182点)(日本画6点)(工芸41点)・書道市展(180点)・菊 花展(256点)・ステージ(6:00~9:00)・三曲と邦舞の夕べ・俳句大会(190 句)・短歌大会(67歌)・川柳大会(140句)・文団協加盟報第36号 加盟 数68団体		
博物館事業	春植物野外観察会(40名定員) 歴史講座＝わらびの作り方(50名)・特 別 世界の蝶(5,000点) 昆虫標本作成講座(50名) 歴史講座＝鯉漁労 (開拓記念館 親子25組) 小樽の歴史散歩(開拓記念館共催 1台札幌 市民 2台目小樽市民) 歴史講座＝たこづくり(50名) 特別展小樽え はがき＝明治・大正・昭和のえはがきに見る小樽の移りかわり [注I] サークル 自然科学研究班(15~6名) 協力体制人員		
図書館事業	文学碑めぐり 4回 各50名 参加者主婦層が多い		
市民会館 事業	公立文化事業団・松竹歌舞伎(昼・夜1,200名) 文化庁移動芸術祭・新劇 「奇跡の人」(955名観客・町内会・定時制高校多数) A席1,800円 B1,800		

	円 C 600 円	
消費者講習会	ストープ分解・しまい方 昼の生理＝化粧品 200 海里問題と食生活に与える影響 食品公害 不用品交換市(市と協催・年4回)	消費者協会 員400名
勤労婦人センター 定期講座	茶道(昼・夜510名・出席率87.5) 料理(昼・夜1,223名89.9) 華道(昼・夜790名84.9) 手芸(昼・夜871名91.0) 書道(昼・夜1,005名69.3) 着物着付(昼・夜800名91.1)	
特別講座	毛皮の種類・質の知識 宝石の種類・質の知識 装飾品を中心としたおしゃれ	
新婦人の会	新年会 マッサージ健康 会員ダンスパーティー 2/19 行動の日 燈油値上げ反対 一せい行動 国際婦人デー参加 樽婦連参加・働く婦人中央集 物価しらべ 子どものための映画会 教育懇談会 中学生をもつ親の 悩みの会 母と子の集い 歌 踊り ダンスパーティー 道大会 支部大会 北ガス値上げ反対 公述人を出議会にむけて教育と燈油請願 街頭宣伝 200 海里 魚かくし 教育費助成 ゆきとどいた教育費行政請願 母性保 護の拡充 教育委員会就学問題 母親大会 北海道 ビヤパーティー 代 表派遣 日本母親大会 ビヤパーティー ダンスパーティー 母と子の映 画会14回 街頭募金有珠山 老人の日=9月議会へ向けて・風呂代・交 通費ただ 物価しらべ ダンスパーティー 料理教室(新婦人しんぶん読 者対象) 15周年新婦人祭り取り組み 小樽・全道集会 母親のための 学習塾 教科書がむずかしくなった 子どもの性教育 ダンスパーティー 小樽母親大会参加 火曜日美容体操 ダンスパーティー 燈油問題こん談 会(毎月) 〔注I〕地域・職場での取組み 班が主体 会員1,000人弱 地域2,000強 会費200円 代表委員制4名	
婦人学級 (父親学級)	家庭教育に関するもの(18回) 一般教養に関するもの(18回) 移動学 級に関するもの(しおかせ号のって12回) 趣味と実技に関するもの (料理教室20回・着付教室4回・手芸と工作19回) 奉仕雑布作り スポ ーツ教室(10回) 音楽教室(2回) 美容教室(1回)	
やんぐすく ーる	I 期 デッサンから水彩画まで(定員20名) 基礎から定石(囲碁)まで (15名) 軟式テニス(20名) II 期 ギター講座(20名) 七宝焼(80名) デッサンから静物画(20名) III 期 木ぼりと版画(20名) きもの着付(20名) 社交ダンス(20名) 手づくり菓子(20名)	利用率 53年1月末 73.0
定期講座	料理5 コース各月4回 ギター 工芸 版画と木彫 茶道 唄う会 水彩 社交ダンス 華道 着物着付 羽球 卓球 軟式庭球 排球(男子)(女 子) 野球	
商工青年学 園	ペン習字(50名) 手芸(40名) 交歓学習 特別教育活動	
ジュニアク ラブその他 活動	理科部・物理部・化学部・天文部・技術部・電気通信部(各50名) 木工 工作部 学習旅行(37名参加)費用7,000円 野外観察会(親子30名ぐらい) 工作会(30点)	利用率低下
おたるこど ものつどい	見晴台→青空図書館(自由読書・親子読書・紙芝居)・キャンプサイド (キャンプの実技指導・モンキーブリッジほか) 総合体育館→。工作のたのしもう(紙ヒコーキ・風車・しやぼん玉)・み んなであそぼう(通りやんせ・電報・押相撲・腕相撲・縄相撲・尻相撲・ 一本橋落し・陣取り・バイナッブル・ドッチボール・輪まわし・騎馬戦・ 救急リレー・竹馬・ミニ づくり・縄とび・バレエ小曲集(昼休み)ほか 。昔のあそび(紙相撲・福笑い・お手玉・おはじき・あやとり・パッチ・ カード	参加者 7,000人
体育館 屋内教室	トランポリン(小学生 冬・春休み) 美容教室(婦人) 市民体力テス ト(30才以上4/24・10/10) トレーニング教室6月・2月中旬～3月中 旬(婦人)10月中旬～11月中旬(中・高令者)1月中旬～2月中旬(OL)	

	卓球教室 9月・11月下旬～12月中旬(家庭婦人) 2月(一般市民) バドミントン 5月中旬～6月中旬(家婦) 11月中旬～12月中旬(一般市民) 親子健康づくり教室10月(親子) ミニバスケットボール11月中旬～12月中旬(小学生)	
屋外教室	歩くスキー教室(花園グラウンド3回) 歩くスキーの集い(天狗山から松公園6回) 市民体育大会(8/21～10/10 グラウンド他29会場延7,700人参加) 歩こう運動(5月～10月6回内雨天1回中止・平均100人前後参加) キャンプ村(7/23～8/4 蘭島1,340人延参加) 青少年スポーツ教室(硬式・軟式テニス80～90人) 小学生アルペンスキー大会(天狗山1,081人参加) 市民体育大会スキー競技大会(アルペン 3/20 距離3/27 320人参加) その他市民ラジオ体操(ラジオ体操連盟)	
温水プール短期教室	水泳教室・家庭婦人(1/19～21 119人) Aコース小学生低学年(1/25～27 104人) Bコース高学年(2/4～24 129名) 一般成人・高校生(2/9～23 5日間116名) 中学生(3/4～18 5日間16名) 婦人(4/12～16) Bコース(4/5～9 176人) 中学(4/19～28 15名) 種目別クロール(5/10～31名) 平泳(5/17 31名) 背泳(5/24 18名) バタフライ(5/31 17名) Aコース(5/11～19 160名) 幼児教室(5/17～21 5日間129名) 一般成人(5/21～6/1 5日間) 幼児(6/7～17 152名) Bコース(6/8～18 194名) 家庭婦人単位クロール(6/21 18名) 平泳(6/23 23名) 横泳(6/25 10名) 背泳(6/28 19名) バタフライ(6/30 12名) 10:00～12:30 一般成人クロール(6/23 7名) 平泳(6/23 0名) 5:00～7:00 バタフライ・背泳 婦人(7/5～13 80名) Aコース(7/6～16 133名) Bコース(8/24～9/3 128名) Aコース(9/7～17 167名) 婦人(9/20～29 193名) 成人(9/21～29 55名) 親子水遊(10/4～6 118名) 水中ゲーム大会(10/10 168名) 市民体育大会水泳競技(10/2 400名) レクリエーション大会(11/3 196名)	
長期教室	11/9 より月末試験検定進級20回・家庭婦人(10:30～12:00 定員30名・週水金) さざ波(初級)・白波(中級) 小・中学生(4:00～5:00～6:00 定員各30名・週木土) 若潮(初級)うず潮(初級)みつ潮(中級) 12月・1月・3月補欠募集 〔目標〕市民大会に出られる	
スイミングクラブ	温水プール専用使用・毎週火水・費用2,000円・会員 200人	
水泳学校	小学校上学年・中学 学校教師指導 往復バス交通費とも3,500円程度	1,360人
夜間スキー講座	一般1)1/11～13 2)1/25～27 3)2/1～3 4)2/22～24 5)3/4～6 検定試験(1/25～27) 〔注〕1回500円程度 寒い日・雪降りの日は10人弱 検定30名平均	20人前後
視力障害者講座	2/18 11:00～ 盲導犬検診 13:50 市政について 15:00 交通事故防止と 防犯対策について 延 126人 2/19 10:00～ 小樽の人物往来 13:00～ 民謡講習 14:35～ 現代病と予 防について 延 48人	

6. おわりに

各分野にわたって市民に年間を通し、呼びかけられている。その方法は公報・新聞・看板・ポスターその他によるが、応ずる人はともかく、知らずにいる人にどう伝えるかまず頭をいためる。時間をかけての働きかけが決定的である。各種の行事が回を重ねるにしたがって市民の経験の中に根をおろしてくる。小樽体育協会加盟団体が24あり、スキー、水泳の講習会はその時期を参加者は待っている。ここに小樽を見ることができる。

各主催者間が相互に提携できる資料・報導をもとに類似・共通・協同できるものがあるなら、より一層の有効な効果をねらうための手段が必要であろう。

*いつ・どこで・何が行われたか。事業内容が一目でわかるよう。

*前年度一覧表が製作され、公表されると今年の日当に利用できる。

*市民も気を配っておくことができる。PR効果も生まれる。

*少ない予算で十分な効果をねらう方法は関係機関相互の協力にある。

個々・場面・場面を考えるのは比較的容易であるが、全体に総合性をもたせて考えることは難しい。集団・団体の中での相互統合行動をとるには相手方をよく見なくてはいけない。実際には容易に応用されにくい。この教訓は各運動態の運営にも共通する。